

# REXPRESS

The Official REX-NET Newsletter NO.5 (Volume 1-5) April, 2006

## Contents

第3回国際教育シンポジウム開催のお知らせ	1	第2回国際教育シンポジウムのご報告	2～12
2006年度会員登録受付はじまる	1	広報担当からのお知らせ	12

### 第3回国際教育シンポジウムのお知らせ

春です。今年もまた、‘元気の出る’シンポジウムの季節がやってきました。本年度は、地方持ち回り方式の第1弾として大阪で開催いたします。第1・2回は、首都圏での開催とあって、特に西日本の方たちには参加しにくい条件であったと思われますが、今回はみなさまのお近くにまいります。

今回は、テーマを「グローバルな視点で今できること」と銘打ち、グローバルな視点を持つ全国各地の教員が各地域で展開している様々な教育活動の様子を広くご紹介します。日頃の授業にすぐ活かすことができる実践例、今後の教育活動のヒントとなる経験の報告など、盛りだくさんな内容でみなさまをお待ちしております。本会の中心となっているREX帰国教員の日頃の教育実践をたくさんの方々と分かち合い、検証していただきたいと存じます。国際教育活動に関心をお持ちの方々の幅広いご参加を期待しております。

当日のお弁当や懇親会など、大阪の「味」も今回のシンポジウムの大きな楽しみのひとつです。お誘い合わせの上、ぜひご来場ください。

日時：2006年6月17日（土）  
10：00～16：30（予定）

会場：大阪府立夕陽丘高等学校ビオラホール  
〒543-0035 大阪市天王寺区北山町 10-10

助成：(財) 国際文化フォーラム

後援：文部科学省、全国都道府県教育委員会連合会、  
大阪府教育委員会、大阪府高等学校英語教育  
研究会（以上、申請中）

シンポジウム参加費（資料費込み）：

非会員 2000円（会員は参加費無料）

懇親会参加費（飲食費込み）：5000円

詳しくは同封の大会パンフレットをご参照の上、「参加申込書」にてお申し込みください。

なお、参加申し込みの締切は、5月31日（水）とさせていただきます。

### 2006年度会員登録が始まりました

本会の運営は、みなさまから納入される会費が頼りです。「これなら5000円の会費を支払った価値がある！」と実感できる工夫を続けてまいりますので、本年度も、昨年に引き続きサポートをお願いいたします。最初の試みとして、「あなたの知識と経験をWEBで全国に発信」できるサービスを開始しました。

本年度から新たに入会をご希望の方は、同封の「REX-NET 会員登録フォーム」をご利用になるか、本会の公式ウェブサイトからお申し込みください。

なお、勝手ながら今年度より、特に会員登録抹消のご連絡がない限り、会員登録を継続するご意志があるものと解釈させていただくことになりました。これで毎年更新フォームをお送りいただく必要がなくなりますが、会費の納入には引き続きご足労をいただくこととなります。ご了承ください。（登録内容の変更や、脱会のご連絡は、同封のフォームをご利用ください。）

未登録の方はぜひ新規入会の手続きを、既に会員の方は会費の納入をお願いいたします。

## 第2回国際教育シンポジウム報告

発信型教育の実践 ～ 自分で考え、表現し、行動できる人間づくり ～

期日 2005年6月18日(土)

会場 横浜市立横浜商業高等学校

主催 特定非営利活動法人国際教育活動ネットワーク/REX-NET

助成 財団法人国際文化フォーラム

後援 文部科学省、全国都道府県教育委員会連合会、大阪府教育委員会、大阪府高等学校英語教育研究会(申請中の機関も含む)

### 1. シンポジウムの概要

私たち REX-NET は、昨年6月、創立記念国際教育シンポジウムを開催し、好評を得たが、第2回目となる今年は、これまでに築いてきたネットワークを駆使し、各地区での地道な活動を全国から集まった参加者へ広く紹介した。開催にあたっては、本シンポジウムが今後全国各地を巡って開催されることを念頭に置き、その第一弾として神奈川県が中心となり企画運営にあたった。

進展するグローバル社会に対応すべく積極的にまた主体的に行動できる地球市民の育成が急務となっている現在、学校現場がその基盤となる教育活動を実践・展開することが求められている。本大会では、大学関係者、初中等教育関係者、国際交流関係者など多岐にわたる分野で活躍されている方々とともに、未来を担う子供たちが、自分で考え、自分の言葉で表現し、主体的に行動する力を身につけるための方法を、「発信型教育」をキーワードにして模索した。

#### ○来賓(一部敬称略)

文部科学省国際教育課長 山脇良夫様  
横浜市教育委員会 磯部修一

#### ○講演・講師

千葉大学大学院教育学研究科教授/千葉総合的学習研究会会長/NPO 法人教育改革ネット常務理事 上杉賢士先生

#### ○発表者(敬称略)(一期は REX 派遣期)

岐阜県立恵那農業高等学校 早野宏樹(14期)(帰国報告)  
横浜市立戸塚高等学校/神奈川県立神奈川総合産業高校/神奈川県立ひばりが丘高等学校生徒  
横浜市立戸塚高等学校教諭 岸 章浩(8期)

大阪府立岸和田高等学校 生徒  
大阪府立岸和田高等学校教諭 谷井隆夫(2期)

#### ○分科会

【第一分科会】運営者 田中信男(岡山県)  
岡山県立津山商業高等学校教諭 守屋陽子  
岡山県立岡山操山中学校教諭 河本政浩(13期)  
【第二分科会】運営者 中原泰男(岐阜県)  
岐阜県立吉城高等学校教諭 下嶋和長(13期)  
岐阜県立大垣北高等学校教諭 酒井 猛(11期)  
【第三分科会】運営者 橋本 恵(大阪府)  
大阪府立柴島高等学校教諭 碓塚桃子(13期)  
奈良女子大学付属中学校教諭 南 美佐江  
【第四分科会】運営者 橋本敏郎(新潟県)  
新潟県立海洋高等学校教諭 久保田和平  
新潟県上越市立高志小学校教諭 中川和代  
【第五分科会】運営者 渋谷 圭(北海道)  
滝川市総武部秘書課国際交流担当 山内康裕(5期)

#### ○プログラム

■開会セレモニー・代表理事の挨拶/テーマ説明

#### ■REX14期 帰国報告

岐阜県立恵那農業高等学校 早野宏樹

#### ■第2回高校生国際交流会議の報告

横浜市立戸塚高等学校3年 表 優希  
神奈川県立神奈川総合産業高校1年 角田紘一  
神奈川県立ひばりが丘高等学校3年 板垣佳那子  
横浜市立戸塚高等学校教諭 岸 章浩

## ■「日韓バーチャル国際会議の報告」

大阪府立岸和田高等学校3年 大仲 琢人  
大阪府立岸和田高等学校3年 丹羽 啓介  
大阪府立岸和田高等学校教諭 谷井 隆夫

## ■ 発表生徒へのインタビュー

横浜市立横浜商業高等学校教諭 栗栖 裕

## ■ 講演・課題提起「student-centered な教育の意義と実践方法」

千葉大学大学院教育学研究科教授/千葉総合的学習研究会会長/NPO 法人教育改革ネット常務理事  
上杉賢士先生

## ■ 分科会

### 【第一分科会】教師と ALT との Team Teaching の授業実践

◇Integrated Lesson の実践

岡山県立津山商業高等学校教諭 守屋陽子

◇未来航路プロジェクトの実践

岡山県立岡山操山中学校教諭 河本政浩

### 【第二分科会】生徒が生き生きと参加する授業実践

◇アメリカでの日本語の授業実践～同期のつながりを活用した、世界にまたがるプロジェクト～

岐阜県立古城高等学校教諭 下嶋和長

◇アメリカでの日本語の授業実践

岐阜県立大垣北高等学校教諭 酒井 猛

### 【第三分科会】国際交流活動の実践

◇国際交流入門の授業実践～REX 派遣先の日本語クラスとの交流 アメリカ、カナダ、中国、ウェールズとのビデオレター、フォトレター、グリーティングカード、eメール交流

大阪府立柴島高等学校教諭 碓塚桃子

◇グローバルクラスルーム～世界数カ国の学校との交流実践

奈良女子大学附属中学校教諭 南 美佐江

### 【第四分科会】国際交流活動の実践

◇姉妹校との交流～ウラジオストックの海洋大学とのイベント

新潟県立海洋高等学校教諭 久保田和平

◇地域にねざした交流実践～ロシア船員・地域住民・行政を巻き込んだ教育実践

新潟県上越市立高志小学校教諭 中川和代

### 【第五分科会】地域社会との連携プログラムの実践

◇地域の素材を生かした人材育成～(社)滝川国際交流協会との連携による国際理解教育の推進～  
滝川市総武部秘書課国際交流担当 山内康裕

## ■全体会（分科会報告） 各分科会より報告

## ■閉会

## 2. シンポジウムの内容

### （1）REX14期 帰国報告

3月にニュージーランドから帰国したばかりの早野宏樹先生がいきなりマオリ語での挨拶を紹介した後、スライドで現地の様子を紹介。会場で実際に参加者同士がマオリ語の挨拶をした。

今回のテーマ「発信型教育」は赴任先では特に意識していなかったと思うが、帰国後の普通の授業で無意識にやっている活動に繋がっているのではないかと考えられる。赴任先では国際文化フォーラムの「であい」をよく使った。赴任先の日本語学習の実情は、生徒が日本語を面白いと思っているかどうかは成果に大きく影響する。発信型という言葉は驚き、感動に出会った時、それが興味のきっかけになっていく、という意味で捉えている。教壇に立った先生と生徒との出会いが本当の意味での「発信型教育」なのではないか。

### （2）高校生による実践報告

#### 「第2回高校生国際交流会議の報告」

IEAC (International Exchange Activities Conference) ～真の国際人を目指して～

高校生が主体となり、高校生の視点から今後何をしていくべきか話し、考えるきっかけになるように開催した。第一回である去年は、初めてだったので、手探りでやっていた点が多かったが、この会議の成功が自信に繋がった。

第二回の今年は横浜市立戸塚高等学校、神奈川県立総合産業高校、神奈川県立ひばりが丘高等学校三校合同主催で高校生が主体となって企画から運営まで行った。三校合同では家が遠い上に、学校行事や個人の用事などと重なり直接話せる機会がほとんどなく、電子メールを活用したりしてきたが、解釈の違いや資料の伝達不足などがあり、うまく伝達できないことが何度もあった。そのような困難な点が多々あったが、高校生一人一人が自分の担当の任務を持ち、何度も話し合いを繰り返しながら実行することができた。計画の段階から3校分の案があり、とても良い意見をたくさん交換することができたというメリットもあった。高校生が企画側として参加ですることによって更に一層の成長を遂げることができたと思う。

## 「日韓バーチャル国際会議の報告」

2月の竹島問題で日韓関係が悪化したが、計画を継続して完成させた。

【大仲琢人君の報告】2月の竹島の日を島根県が制定すると、両国関係が悪化。韓国は半日運動があるので、厳しいことを言われるのではないかと思った。大統領の日本の歴史問題批判のほとんどが政治家に対するものであったが、一般人に対する批判も一部あったので、解決策が見出せなかった。そこで竹島について勉強した。日本では領土問題だが、韓国では歴史問題プラス領土問題だった。解決策に迷っていた時、外部講師から領土問題は過去から続いているので双方譲ることはできないが、領土問題が歴史問題となっていることを日本側が理解し、時間を掛けて解決策を考えること、そして、それを韓国が受け入れることが大事なのだと学んだ。

【丹羽啓介君の報告】会議に参加する前にはただの隣国だと思っていたが、この会議の後、韓国は対立するものを持つが大切なパートナーと感じ親近感が沸いた。そう思ったら、自分が成長したように感じた。以前から国際弁護士になりたいと思っていたので、会議に参加するにあたり、客観的情報を取り入れ、他国との関係を見つめる努力をしないと、世界で働けないと思った。大阪弁護士会の人から物事の二面性の良い所を取り入れることが大切と学んだので、普段から実務的に考えられるようになった。韓国総領事館勤務の外交官は、他国と友好的な政策を取るようにした方が良くとも言っていた。自分達が学んだものを生かせる人間になったと思う。6月20日、日韓首脳会議がある。今後韓国もしくは大阪の韓国学校で、日本が韓国を、韓国が日本を代表したバーチャル会議を開きたいと考えている。

### (3) 講演・課題提起

#### 「student-centered な教育の意義と実践方法」

基調講演で今回お願いした千葉大学大学院教授の上杉先生は、Project-based Learning (プロジェクト学習: PBL) について研究されている方で、その発祥地であるミネソタ州まで出かけ現地調査をするなど、先駆的かつ献身的にPPBLに取り組まれている。

同先生は本講演で、ご自身がミネソタ州へ出かけたときの記録をもとに、PBLに関しての基本的な考え方、PBLが実際にどのように行われているかといった具体的な話をされた。PBLが行われている学校での教員の役割や成績の出し方などの具体例がふんだんに盛り込まれており、現

場で教えているわれわれ教員には実践的なものばかりであった。教育とは何であるかといった教育の真髄を考えるよい機会にもなった。生徒にどのように働きかけ気づきを与えていくかといった、リップサービスで終わりがちなこの教育の根本的な問題に新たな視点の提起としてPBLのお話をいただいたのは我々の日常の教育実践を振り返るよい機会となった。

まずPBLの基本的な考えについてであるが、生徒自身がプロジェクトを通して、何が知識や道具として必要とされているのか、またどのような計画の下に進められなければならないものなのか、そのプロジェクトを遂行するに当たって、自分のどのような能力が評価されるのかということを考えるのである。生徒主体(student-centered)、学習者自立(Learners' Autonomy)など生徒の自主性や主体性を表す言葉がまさにPBLの考えの基本となっている。『学習は興味・関心があって初めて学ぶことに繋がる。その具体的な方法が、PBLにはある。』と言う言葉が印象的であった。

次に教員の役割についてであるが、『教えるのではなく、生徒と一緒に肩を並べて一緒に考えてやるだけでよい。話を聞いてあげるだけでよい。』と先生は強調されていた。勿論この点については批判も多くある。基本的な知識なしにPBLなどどうして可能であろうか。スポーツでも基礎体力が必要であるように、学習にも基礎学力が必要である。批判は止まることを知らない。しかしながら先生が何度も協調されていたことは、教員自身の、固定観念に囚われない意識改革が必要であるということである。

我々REX教員はそれぞれの派遣地でいろいろな教育のあり方を目の当たりにしてきた。同じ国でも地域や学校の数だけ様々な方法があった。一方、異なる国でも同じ方法があった。こうしたことを我々は肌で体験してきた。帰国後の我々はPBLとまではいかないまでも、生徒が主体的に授業へ取り組める方法を実際に行ってきたのであり、それをいろいろなハードルを越えながら日本の教育現場に浸透させていかなければならないのである。

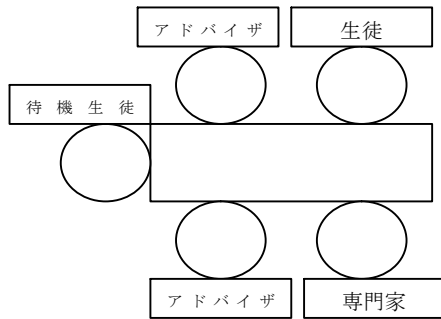
文部科学省が先日発表した次期学習指導要領の基本的な概念となる『言葉の力』を育成していくためにも、生徒自身が自分で考え、自分の考えたことを発信していく教育の実践が求められることを痛烈に感じさせる、貴重で示唆に富む講演であった。

## 当日のハンドアウト

# Student-centered な教育の意義と実践方法

千葉大学 上杉 賢士

### 1. アメリカの学校で目撃したシーン



左の図は、本年5月20日、アメリカ・ミネソタ州にあるニューカントリースクールで目撃した評価の場面です。プロジェクト・ベース学習を一通り終えた生徒が、3人の大人に囲まれてその成果の評価を受けているのです。でも、評価の場面にしてはふんごやかな雰囲気が漂っていました。アドバイザーの言葉に、生徒は納得の表情でうなずいていました。さて、ここでどんなことが起きていたのでしょうか。

### 2. 想像してみましょう

- 生徒の心境
- アドバイザーの意図
- 専門家の役割
- 待機生徒の心境

### 3. プロジェクト・ベース学習の理念と方法

- 自分の興味・関心に基づいてテーマを決める
- 二つの評価規準があらかじめ渡される
- セルフコントロールを基本に、アドバイザーが寄り添う
- プロジェクト・ベース学習がホールカリキュラム

### 4. “願い”の域を超える要件

- アドバイザーの役割
- ルーブリックの存在
- Evaluation から Assessment への転換

---

【文献案内】ロン・ニューエル著、上杉・市川洋子監訳『学びの情熱を呼び覚ますプロジェクト・ベース学習』学事出版  
上杉・市川洋子共著『プロジェクト・ベース学習で育つ子どもたち～日米18人の学びの履歴』同、来週発売  
【イベント情報】8月21日～25日に、MNC Sから講師を招聘して大型ワークショップを開きます。関心のおありの方は  
uesugi.k@faculty.chiba-u.jp 宛にご連絡ください。

#### (4) 分科会報告

##### 【第一分科会】司会：田中信男(岡山県)

発信型教育へのきっかけ-ALTを巻き込んだの試み

○Integrated Lesson 全ての英語科目を関連付ける

岡山後楽館高等学校 守屋陽子

前任校(岡山県立津山商業高等学校)は商業科国際経済科3年に男子が3人、4年生は大学進学(推薦)が30%、短期大学進学(推薦)が30%、専門学校進学が30%、就職が10%なので、評定平均値を挙げる、定期テストの成績が良いことが目標になっている。そのため試験範囲を丸覚えするだけで力がかからない。それまでの授業形態は国際経済科3年生は週7時間で英語Ⅱ(3単位)、ライティング(2単位)、リーディング(1単位)であった。裏技としてリーディングの時間をもらってALTとのOC(1単位)を実施したが、アウトプットが少なく、またALTとの関わりも少なかった。最初はロングマンのテキストを使いディスカッションをした。問題点としてなかなか進度が進まないし、ライティングも自分の考えよりは、教科書のヒントを訳してしまうことが多かった。生徒はALTと話したいと言うが、ALTの授業は限られているので、ALTを生かしきれなかった。

Integrated lessonとして新たに試みたことは週7時間の中で教材作りをALTにもやってもらい、記事や意見を読ませ、(2時間)意見や考えを書かせ(3)Practice(1)、推薦入試が終わった後の3週間にPresentation(1)を指導してもらった。

題材として一週目はJapanese TVについて、二週目はJapanese Overseas & Foreign people working in Japanについて、三週目はCell-phoneについてどう思うか、を取り上げた。各時間の具体的な活動内容は、記事や意見を読んで要約し、読みながら賛成、不賛成に丸をつけ、賛成できる意見を記事の中から集め自分のスピーチに使えるような自分自身の意見を書く。接続詞を使って、前の時間に集めた文章を繋げ、ALTに手伝ってもらって1分間スピーチを完成させる。スピーチの評価観点を理解し、ALTのモデルスピーチを聞き、練習する。またクラスを少人数に分け、ペアで練習する。評価シートを使い相互評価する、などであった。

苦労した点としては時間割変更をして7名の教員がどのパターンでもやらなくてはならなかったことと、一クラス40名をPresentationのために三つの教室に割り当てなければならなかったことがある。複数教員で集まって

あらかじめ相談して評価の共通理解をしておかなければならなかったのだが、その打ち合わせの時間確保がたいへんだった。

成果として生徒が自信を持って話せるようになり、3回目のスピーチでは声が大きくなった。発音に向上が見られ、ジェスチャーを使ってできるようになった。授業への集中度が高まり、友達の意見を聞くようになった。OCに対するモチベーションが高まった。スピーチを書く力がついた。

生徒からは、みんなの前で英語を話す自信や自分で英語を書く力や効果的なスピーチをする技術がついた、論理的に考えられたし友達の意見を知ることができ生徒や友達からのフィードバックがプラスになった、どの英語の先生にも質問が出来た、などの意見が聞かれた。しかし反面、題材が難しくモデルの意見と似てしまったり、友達の難しいスピーチをする内容がわからなかったり、ライティングの時騒がしくなってしまう、先生が教室に40人に二人だったので、一人では足りないと思う、3週間では短い、逆に3週間は長い、などの意見も聞かれた。

##### 【会場からの意見・コメント】

普通の授業でも使えるのではないかな。英語Ⅱでも復習の時に使える。1年生でやって自分達でもできたというところで発信型に繋がる。自分達で題材を取って来るところもできる。各時間の活動は目標に向かって段階を踏んで、リーディング、ライティング、アウトプットという段階があつて良かった。

○ 英語での積極的な情報発信をめざして

岡山県立岡山操山中学校 河本政浩

操山中学校は県立併設型中高一貫校で中学1学年120名(3クラス)・高校1学年280名(7クラス)の規模。教育課程特色として未来航路プロジェクト⇒高校を見据えて基礎基本を定着させる。多種多様な選択教科・科目を置く。英語科には日本人教員4名、ALT1名(地域の人材活用でフィリピン人採用。)がおり、少人数授業、ALTとTT、JTE 同士のTT、2年生、3年生にコミュニケーション中心の授業を行っている。英語科の取り組みとして通常の授業の中で、好きな本などトピックを与えるトピックトークやALTが2~3分話し、書かせるスモールトーク、毎時間一人か二人前に出てやるスピーチ、会話的な内容の学習の後、スキットを作らせて発表させる活動(生徒は好き)などを行っている。選択授業では、1年生には年間30時間、赴任先の現地校の生徒を紹介して手紙を

交換した。返事がない子もいたが、Eメール交換にも発展した。内容をつかむために絵本を読ませたり、ハリーポッターなどの映画をみてシーン毎に区切って聞き取れそうな表現を聞き取らせた。2年生は実質17時間、図書館にある洋書絵本を読んで英語で紹介するブックトークさせた。今後、世界遺産や世界の名勝についてパンフレットを読んで英語でプレゼンテーションすることも計画中である。3年生では Impromptu speech として、トピックを与えてディスカッションやディベート、タイトルを与えてスキット作り、商品宣伝の広告などをさせた。また3年生全員対象として7月にコミュニケーションと国際理解を深める為に、6、7人毎にALTをつけ、またアフガニスタン、イラン、ペルーなど非英語圏の留学生も呼び、イングリッシュサマーキャンプを行って、情報交換をした。評価の基準はスピーチの原稿で、分量と内容の論理的展開や覚えているかどうかを見る。リズム・発音・イントネーション・デリバリーで評価する。自分のREXの経験からALTにactive roleを与えたいのでauthentic resourceやmotivatorとしての役割やスピーチの司会者をやらせ、進行上の英語を生徒に聞かせたり、授業後の振り返りをさせた。

#### 【全体の講評】

柏崎先生：今の英語教育は進んでいる。上手にALTを使って英語レベルが伝え合う力となっている。海外で日本語を学んでいる生徒の存在を伝えることは、日本人生徒の英語学習のモチベーションに繋がる。

#### 【第二分科会】司会：中原泰男(岐阜県)

生徒が生き生きと参加する授業実践

REXのOB、赴任準備中のREX16期生、東京外国語大学、横浜国立大学、横浜市内高校教諭、国際文化フォーラムなどから19名が参加した。

#### ○ アメリカでの日本語の授業実践

岐阜県立吉城高等学校 下嶋和長

(下嶋和長氏が都合で欠席の為、司会者が代理発表)

アメリカでの勤務中、発信型発見授業として行ったことの紹介として、まず日系企業製品のリサーチの実践報告があった。身の回りにある日系企業製品について調べさせて、日本文化や日本の社会に興味を持たせるというものであった。生徒自身がリサーチする中で、家族も巻き込んで宿題が盛り上がり、日本語をとっていない

クラスでもアンケートを取ったりして広がりを見せたことや、発表内容を掲示することで、学校内で活動をアピールしたりできたとのことであった。もう一つの実践発表が、REX派遣者のつながりを活用した、世界にまたがるプロジェクトについてであった。世界に散らばるREXのつながりを利用して、世界の高校生に学校生活や普段の生活に関するアンケートを取って自分たちの生活と比較し、自分たちの生活を客観的に見させるという活動であった。アンケートの作成、結果を回収した後の集計、結果分析レポート、資料作成、教育省での発表や郡教育委員会でのプレゼンテーションまで、全て生徒が主体的に動いて行ったということであった。

参加者からはREXプログラムそのものに関する質問や、アンケートの実施時期、アンケートの目的達成度についての質問があった。質問に対する答えと同時に他の参加者からの意見もあり、活発に意見が交換できた。参加者の声として、このアンケートは、赴任して1年以上経過して、現地で生徒を動かしやすい状況ができてから実践したことが上手く生徒を導けた要因だと考えられること、生徒が各国の事情を知り、自分たちの生活との違いや共通点を発見できたことは、非常に意義があること、また実施にあたって注意すべき点として、一つの国の一部の生徒の実態がその国全体の実態ではないことは、偏見の防止という意味でも注意すべきだという意見などがあった。

#### ○ 帰国後の授業で生かす派遣先の経験と情報

岐阜県立大垣北高等学校 酒井 猛

最初に、派遣先ウェストバージニア州の特色などの説明と、そこで派遣後に役立てるために、写真やビデオも帰国後の授業を意識してできるだけたくさん集めてきたことなどが話された。次に、帰国後に携わった、岐阜県が持っているホームページ「岐阜県まるごと学園」の中の、教育用デジタルコンテンツの紹介があった。この教育用デジタルコンテンツは、誰でも、明日にでも使えるものであり、自習に使えるコンテンツも授業で使えるコンテンツもある。教員が授業で利用する教育指導用コンテンツには、「英語で学ぼう、世界の年中行事」というコンテンツがある。それは、REX派遣経験者や、現REX派遣教員とのつながりを利用して手に入れた写真やビデオを利用して作成されたものであり、アメリカ・オーストラリア・ニュージーランドの年中行事について見たり聞いたりして、英語のリスニング教材として使用できるよう

な工夫がされたものである。これらのコンテンツを利用し、生徒が生き生きと参加することができるようにする実践例や、その授業に参加した生徒の感想などを紹介しながら、酒井氏は、「せっかく貴重な経験をしてきたのに、そこで手に入れた、生きた教材を、それぞれの派遣者が個人の思い出としてアルバムの中で楽しむだけではもったいない。ぜひ共有財産にするべきだ。」と強調した。分科会参加者から、県が3年計画で開発してきたこのデジタルコンテンツについて、その総予算や、利用方法を一般教員に対して紹介する方法について質問が出され、デジタルコンテンツの開発予算・英語だけで一つ50万円くらい、ということや、使用方法は研修会などで英語教員に対して紹介されていることなどが説明された。また、岐阜県の REX 派遣教員同士の直接のつながりを利用した「平成16年度いつでも会える海外の友達支援事業」という活動で、学校間総合ネットの遠隔学習機能（TV会議システム等）というものを活用して、海外との交流活動を実施した例が紹介された。REX11期同士のつながりを利用して、コリンダ高校（オーストラリア）、長良高校（REX11期石神氏が勤務）、大垣北高校（酒井氏が勤務）の三校合同交流授業（英語のディベート）が行われたことの紹介があった。参加者から、ホームページを使った教材活用について、県を越えたつながりの可能性を感じる、という意見が述べられた。すぐにでも実施できる可能性があるものとしては、REXのそれぞれの期が持つホームページなどで教材作りを共有できるだろうし、REX-NETのホームページを使ってその共有の可能性を広げることかもしれない、という意見があった。まだまだどんどん質問や意見がつながり、すばらしい盛り上がりを見せていた分科会であったが、時間がなくなり、終わらざるを得なかった。参加した方々のうち、これから派遣先へ赴任する REX16期の方々が、終了後に酒井氏にいろいろと質問を続けている状況であった。参加者からの発言も多く、とても有意義な会になった。

### 【第三分科会】司会：橋本 恵(大阪府)

#### 国際交流活動の実践

○「国際交流入門」クラスと REX 海外日本語クラスとの交流

大阪府立柴島（くにじま）高等学校（総合学科）

碓塚（かきつか） 桃子

碓塚先生は、総合学科に在任し「国際交流入門」という科目を担当しており、その授業内容について発表して

いただいた。授業では、外国人ゲストを授業に招いて、SHOW&TELL コンテストや文化交流会を行ったり、生徒が街の外国人にインタビューをしたりするなど、外国人と実際に接して、日本と世界を肌で感じ、また積極的にコミュニケーションを取ろうという姿勢を養っている。また碓塚先生が REX プログラムで 2002 年にイギリス・ウェールズに派遣されてからは日本語授業の中で、日本語を選択している生徒たちと、柴島高校の「国際交流入門」を選択している生徒たちとビデオレター、フォトレター、グリーティング・カード、Eメールなどで交流を行った。帰国後もまた、柴島高校で「国際交流入門」を担当し、派遣中の REX15 期の先生がたを通じて、米国・カナダ・英国・中国の4カ国と交流を行っている。問題点としてレジュメにもあるが、①プライバシー保護 ②費用 ③学期の違い ④パートナー生徒の欠席やメールの文字化けなどがあげられる。

碓塚先生は REX プログラム帰国後、その経験をフルに、また積極的に活用されている。日本にいる教員と海外にいる日本語教員が協力することによって、異なる国々の生徒たちが実際にコミュニケーションを取れるという素晴らしい授業である。教科書のない「国際交流入門」によって、生徒の好奇心を刺激しながらコミュニケーション力を積極的に養う REX プログラムの利点を最大限に活かしたすばらしい授業と言える。

○ Global Classroom と英語授業での取り組み

奈良女子大学附属中等教育学校 南 美佐江

奈良女子大学附属中等教育学校（以下、奈良女子中等学校）では、スコットランド、ドイツ、スウェーデン、チェコ、南アフリカ5カ国6校と毎年1回各学校が一つの国に一同に集い、学生会議を開く国際交流事業を積極的に行い、それを中心に Global Classroom（以下、GC）を行っている。会議では、地域と地球の抱える問題やテーマを設定し、それについて各校で話し合われたことを生徒自身が持ち寄り、ディスカッションを行う。この GC では、今回の REX-NET 全国大会のテーマでもあった「発信型教育」が実践されており、また英語圏にかたよがちな国際交流を、英語圏以外にも目を向けて行っている。さらに、奈良女子中等学校では、英語カリキュラムに“theme-based instruction”を取り入れ、英語の4技能を統合した形でのダイナミックな授業展開を目指しておられ、GC 会議に参加する生徒だけでなく、学年全体で取り組んでいる。GC は生徒たちが習得した英語学習の成果



を活用する場ともなっている。

国際交流といえば、英語圏の学校との交流に偏りがちだが、それ以外の国々との交流をしているのが、斬新であり、ただの文化交流だけにとどまらず、世界にあふれるさまざまな問題、あるいは各国が持つ共通した問題などを若い世代の生徒達自身が話し合うということも、素晴らしい。

来年のGC会議は奈良女子中等学校が主催で、日本で行われるということなので、是非見学したい。

詳しい内容は、<http://www.globalclassroom.cz> で閲覧できる。

#### 【第四分科会】司会：橋本敏郎(新潟県) 国際交流活動の実践

##### ○ 姉妹校との交流

～ウラジオストクの海洋大学とのイベント～

新潟県立海洋高等学校教諭 久保田和平

新潟県立海洋高等学校は107年の歴史を持つ県内唯一の海洋水産高校で、海洋科学科(海洋水産コース、栽培技術コース)、食品科学科、海洋工学科(海洋工学コース、マリン技術コース)があり、「国際理解を深め、国際感覚を身につける教育を推進し、水産業を取り巻く国際環境や水産物の貿易及び海外の水産事情を理解させるとともに、時代の変化に対応した水産業の担い手としての資質・指導力の向上を図る」ことを目的として、学校での実習の他に学校所有の実習船「海洋丸(299t)」で国内外に実習へ出かけ、現地の学生達との交流も行っている。

海洋生産コースの生徒は、3年生の5月に8日間のカニ籠漁業実習を行い、そのうちの4日間ウラジオストクに滞在し、現地の海洋国立大学(旧極東国立海洋アカデミー)の学生などと交流を深めている。この交流は県からの援助で平成8年に始まり、現在は学校独自の活動として続いている。新潟県はロシア沿海地方と姉妹関係にあり、当時REXプログラムで新潟県の高校教員が派遣されていたこともあり、海洋国立大学と姉妹校提携をし、友好親善を深めることとなった。保護者説明会を開いたり、生徒達は、ロシア人やロシアでの生活経験者などから文化や言葉などを少し学習し、出発をする。まず、日本海にカニ籠を入れ、その後ウラジオストクに上陸する。ウラジオストクでは、海洋国立大学の学生とコンサートやスポーツをしたり、お互いの実習船を訪問することによって交流を深めている。海洋国立大学の学生の中には

日本語を学習している者もあり、2回開かれるレセプションでは、日ロ両方の言語で自己紹介をしたり、英語やジェスチャーを交えて意思疎通を図っている。日本語選択者が市内を案内してくれることもあった。また、他の水産大学や水産専門学校、小中学校訪問も行い、4日間の滞在のあと、日本海に入れたカニ籠を上げ、帰港する。

実習後、生徒達はレポート等をまとめ、一部の生徒は県の産業教育フェアや漁業従事者の会議などで発表を行う。生徒の変化としてまず挙げられるのは、ロシアへの印象の変化である。実習前よりもロシアのことを身近な国として捉え、友好的な見方をするようになってきている。また、手紙やメールの交換をし、連絡を取り合い、生徒の中には日本に留学してきた学生との再会を果たし、更なる友情を深めている者もいる。

このロシア・ウラジオストクとの交流では、生徒・学生が互いに意気投合し住所を交換するなど、国際理解教育の年齢の適時性も感じられる。帰国後も交流を続け、今後さらに国際化に対応できる人材になるであろうと考え、文化の違いや言葉の問題、そして予算等の問題もあるが、継続をしていきたい。

##### ○ 地域にねざした交流実践

～ロシア船員・地域住民・行政を巻き込んだ教育実践～

新潟県上越市立高志小学校教諭 中川和代

本実践は1999年からの2年間、総合的な学習の時間の移行期間に4、5年生の授業で行われた。前任校の上越市立古城小学校は、日本海に面する直江津港からすぐの場所に位置していて、国際港という性質から、外国人船員、特にロシア人をよく見かける地域である。初めは「直江津港から世界へ」というテーマで港の歴史や貿易などについて調べていたが、外国船を訪ね船員と接していくうちに、船員に対して親しい気持ちがあわくと同時に、保護者を含め地域の人の船員に対する感情とのギャップを感じてきた。それが自然の流れとなって、船員との交流を通して、自分たちが船員のためにできることはないか、また、大人達の否定的なイメージを改善できないかという活動に発展することになった。実際に地域の現状を把握するために自分達で町を歩き、外国人船員にはどのように映るか再探検したが、ゴミが落ちていて汚い、外国語の看板がなく過ごしにくいなどということがわかった。一方地域の人にアンケートを行った結果、外国人船員を見かけることは多いが接することは少なく、また船員に

よる犯罪が多発し、印象が良くない、きれいで安全、活気のある町にしたいなどという回答を得た。

・プロジェクト1「あいさつ・交流面」

直江津港に入港する船の大部分がロシア船のため、ロシアに絞って活動をした。ロシアのことを知るために、ロシア語講座をしている人からロシア語を教えてもらったり、ロシア船に乗り、船員と料理作りや折り紙などを通して交流を深めた。船員も子供達が来るのを楽しみにしていて、船員の犯罪や事故などが多いので気をつけて欲しいなどという子供からの苦言にも真剣に対応してくれた。地域の人には船員への印象への理解を深めるために、交流の内容を新聞にして地域に回覧したり、ロシア語のあいさつカードを作成し配布した。このような活動を通して大人達も理解を示し始め、PTA行事としてロシア人船員を招き、料理会を開くことになった。

・プロジェクト2「ごみひろい」

港や町に探検や見学に行った時にはゴミ袋を持って行き、帰りにゴミを拾った。

・プロジェクト3「外国語の看板作り」

乗船した時に船員にどんな情報があると便利か聞き、企画書を作成した。港や上越市の様子がわかる外国語の看板を作ってもらえるように市長に直接頼んでみたところ、快諾してもらい150万円の予算を次年度がついた。その後業者と相談し、6年生の時に英語とロシア語の案内地図が完成し、港の入り口に設置してもらった。

初めは「港を調べる」という活動であったが、地域や行政を巻き込む大きなものへと変化していった。児童の積極的な活動が保護者や地域の人にも受け入れられ、考え方を変えていった。その変化を児童達も感じ、自分達の意見が受け入れられたことから「やる気になればできる」という自信にも繋がった。その後の様子を見ると、受け身の姿勢が強かった児童が、主体的に何かに取り組んだり、自分の意見を積極的に言うようになっていたり、また地域への誇りを持つようにもなった。児童の中には卒業後、英語スピーチコンテストで県代表になったり、海への興味からか海洋高校へ進学した者もいるが、この活動が良い影響を与えた結果だと思われる。

この実践も2年間(看板完成までには3年間)で終わってしまったが、このような活動の問題点としては、担当が替わると終わってしまうことが多いことである。継続していくには学校全体として計画を立てて取り組み、地域と学校が長期的な展望を持って協力するなどの対策が必要であると思われる。しかし児童一人一人の中に活動のエッセンスが残れば、理念は広がり地域に根付いてい

くと考えられる。

【第五分科会】司会：渋谷 圭(北海道)

地域社会との連携プログラムの実践

○ 地域の素材を活かした人材育成

～(社)滝川国際交流協会との連携による国際理解教育の推進～

滝川市総務部秘書課交流推進グループ/社団法人 滝川国際交流協会事務局 山内 康裕

滝川市は北海道にある人口42,000人の市。基盤産業である農業で外に目を向ける国際先進都市を目指している。1990年に国際貢献として国際理解教育の推進が始まった。各学校への英語指導助手も北海道でいち早く昭和62年に配置されている。

滝川市の国際交流・国際協力の現状は2000年ボリビア支援、マラウイ支援、2003年農業技術交流 スタディーツアー、2004年ブータン留学生受け入れ、高校での姉妹校交流などを行っている。

国際理解教育における地域との連携事業は外部との連携は事業にもとってメリットが多いこと、また企業や各種交流協会には国際交流のため活用できる予算があることがメリットである。反面時間がかかることや担当のやり方が事業を左右する重要なファクター担ってしまうことがデメリットである。

国際交流・国際協力で育むのは、物事を客観視できる公正さである。789戸の農家のうち100戸が国際交流に関わっている。発展途上国に農業技術を伝えようとする使命感が言葉のギャップを乗り越えて自信になっている。職業と技術を通じた国際交流・協力によって人生が変わったとまで感想を述べる人もいる。

明日を担う人材育成のために総合学習を単教科にしておかず、様々な科目や実践に広がる可能性を大事にしたい。学校での単独継続は難しいが、地域社会と連携することで継続と発展ができる。

予算は民間企業にスポンサー企業になってもらう努力が必要である。自治体は採算的に厳しいが、教育分野においてはポイント毎に学校を連携する準備がある。ただし認可にかかる時間は長い。

北海道では自治体のALT派遣打ち切りが相次いでいる。交付税で算定上は確保しているはずなのに原因が不明である。地域でも人材を発掘する努力が必要で、通訳ボランティアなど町の持つ資産を活用することが必要である。

REX プログラムの歴史認識が必要であり、REX プログラムの立ち上げに関わった岡本薫氏著『新不思議の国の学校

教育—日本人自身が気づいていないその特徴』などは大いに参考になる。

## 4. シンポジウムの成果と課題

### (1) シンポジウム開催の意義

国際文化フォーラム、文部科学省、全国都道府県教育長協議会、横浜市教育委員会、東京外国語大学留学生日本語教育センターをはじめとする団体、個人からの支援を得て、第2回国際教育シンポジウムを無事開催することができた。2年前にNPOとしてスタートして以来、地区単位での活動はあちらこちらで本格的に始まっているが、全国単位での事業となると現在のところこのシンポジウムを開催しているのみである。それだけに、このイベントの持つ意味は大きい。

シンポジウムを開催することには、REX-NETの活動にとって二つの意義がある。ひとつはこの場が国際教育活動の内容充実の良ききっかけとなりうることである。実践事例を発表するチャンスが恒常的に確保されていることで日常の活動に一層身が入る。聴衆として参加するだけでも、そこで見聞きしたものを持ち帰って日頃の活動に応用することができる。

もうひとつの意義はネットワークの活性化である。1年に1度の本行事を開催することにより、定期的にネットワークを覚醒させ、会員個人や地域の自覚を促すことができる。また、そこで新たに知り合った参加者同士の交流も期待できる。今回は、事前に地域代表者会を開催し各地域にひとつずつ分科会を担当してもらったことで、地域発の発想が活かされ、たくさんの活動事例を発掘し、共有することができた。

### (2) シンポジウムの評価

昨年度は、第1回を記念して歴代REX研修生の思い出の場である東京外国語大学の素晴らしい施設をお借りして2日間にわたって開催したが、本年度は、横浜市立横浜商業高等学校に場所を移し、日程も1日へと短縮した。これは今後シンポジウムが各地域持ち回りで開催されていくことを念頭に置いたもので、規模を適度に縮小することによって、運営の簡素化を図り、担当する地域が気軽に引き受けやすい態勢を創出しようという意図からである。また、1日開催にすれば、多忙な日程を調整しやすく、多数の方が気軽に参加できるのではないかという読みもあった。規模の縮小にあたっては、シンポジウムの質が低下することがないように細心の注意を払った。

地方持ち回りの第1回目となる今回、多少の参加者の減少を危惧していたが、杞憂に終わった。主催者側を除き、会場一杯の約80名の参加を得ることができた。

全国からの参加者もさることながら、地元横浜の教育関係者の顔が予想以上に多数見られたことは、地方開催の意義を感じさせた。

今回のシンポジウムのキーワードは「発信型教育」であった。自分で考え表現し行動できる人づくりを目指すものである。この言葉は、生徒にも教師にも当てはまる。教師は、自分で考え表現し行動できる生徒を育てると同時に、自分で考え表現し行動できる教育者になろう、というほどの意味である。

発信型生徒を育成するための一方法としての上杉氏の講演は大変有益であった。プロジェクトベースドラーニングという、学習者のモチベーションを高めるための自己コントロール型の学習方法が紹介された。また、発信型の姿勢を身につけた生徒本人たちの発表がプログラムに組み込まれていたことは、この種の会合では特筆すべき試みであった。一般的な教育研究集会では、教育活動の目的と手法の提示からその評価まで、実践者の立場からのみ報告するのが普通であるが、今回は、その教育活動を受けた側からの生の声を聞くことができた。同時にその発表の背後にある指導者の行き届いた配慮がはっきりと感じられた。事後のアンケートでもこのパートは好評を得ている。

一方、発信型の教育者が活躍する場として、分科会が設定された。各分科会では、ALTを活用し学習者に自信を持たせる授業展開の紹介、外国人との交流の中から自分たちの地域を見直し発信する教育活動、帰国教員の派遣期を軸にした教育的交流の展開、教壇ではなく行政で活躍するREX帰国者の地域交流活動の紹介、など、盛りだくさんのプログラムが披露された。どれも内容が濃く、終了後、他の分科会もぜひ参加したかったという声が数多く聞かれた。アンケートを見ても、REX教員の経験は(REX教員以外の方々にも)充分伝達されていることがわかった。私たちが目指した、「元気の出る」シンポジウムは成功であったといえよう。

### (3) 今後の課題

次回のシンポジウムは、大阪地区が中心となり2006年6月17日(土)に、大阪府立夕陽丘高等学校で開催されることが内定している。首都圏偏重の中央集権的イメージから脱却し、新たな動きを視野に入れた、文字通り網目状の活動へ向けての第一歩である。2回の首都圏開催で蓄積されたノウハウを活かしつつ、地方開催の意義を自覚して、新たな可能性を模索してい

なくてはならない。

今回、シンポジウムの企画運営に先立ち、12月に地域代表者による事前会合を横浜で招集したが、これは非常に有効であった。ITが進歩しているとはいえ、「お互いの顔を見ながら話し合える」場の創出は必須であることを痛感した。会合出席のための旅費の捻出は頭の痛い部分であるが、克服すべき課題である。

前年度の報告書で課題としてあげた各地域・会員の

具体的な活動や事業の振興は徐々に動きを見せているとはいえ十分とはいえない。引き続き補強していきたい活動目標である。

更に、この章の冒頭にも述べたように、ネットワークを活かした、シンポジウム以外の全国規模での活動をさらに創出していく必要があると思われる。(了)

### 3月理事会開かれる

去る3月22日(水)、理事12名のうち、伊東、吉田、中野、栗栖、岸、永井の6名の参加を得て、東京事務所にて05年度定例理事会を開催しました。欠席の6名からは全員委任状をいただきました。

最初に05年度の活動報告と決算報告を承認しました。校務多忙に加え、NPOという形態維持のために予想以上の時間を割かねばならず、代表理事を始めとする事務局周辺が十分に機能できなかったことが反省点としてあげられました。

続いて、06年度の事業計画と予算を審議しました。吉田理事より、魅力ある活動の基盤としてまず活力のある「ネットワーク作り」を、というご指摘があり、それぞれの会員の得意分野を登録管理し、WEBを駆使して発信・受信して活用してもらうサービスに着手しました。(フライヤー同封)

最後に、2年間の任期満了に伴う役員の改選に話題を移しました。現理事の佐藤郡衛理事が、本務校ご多忙のため役職継続を辞退されたので、大変残念ではありましたが、了承しました。他の理事は続投いたします。

### 本年度総会は6月17日(土)

本会の2006年度総会を、第3回国際教育シンポジウムの当日(6月17日)に、シンポジウムに先駆けて9時30分より、同会場(大阪府立夕陽丘高等学校)にて開催いたします。会員の方々には、後日、別途総会のご案内をお送りいたします。多数のご参加をお待ちしております。

### 広報担当からのお知らせ

#### さようなら、紙のREXPRESS

#### REXPRESSの配信方法が変わります

REXPRESSは今まで、REX-NETの会員層拡大のため、事務局が把握しているREX関係のメーリングリストに掲載されているすべての方々にお送りしてまいりましたが、今号(第5号)をもってその方式を終了し、次号(第6号)からは、会員登録された方のみへの配信とさせていただきます。配信方法は原則として電子メールといたします。電子メールが読めない環境の方、紙の印刷物のほうが好きな方には、従来通り印刷物の形式でもお送りいたします。その際は事務局までご一報ください。

これを機会に、公式ウェブサイトのコンテンツにも工夫を加え、会員のみが利用できるセクションを設けるなど、会員の方々に“登録したメリット”がより実感できるように努力してまいります。

#### 特定非営利活動法人

#### 国際教育活動ネットワーク/REX-NET

##### 横浜事務所

〒232-0006 横浜市南区南太田 2-30-1  
横浜市立横浜商業高等学校内  
TEL: 045-713-2323(学校)  
FAX: 045-713-3969(学校)

##### 東京事務所

〒163-0726 東京都新宿区西新宿 2-7-1  
新宿第一生命ビル 26階  
(財)国際文化フォーラム内  
TEL: 03-5322-5211 FAX: 03-5322-5215  
URL: <http://rexnet.loops.jp/>

発行責任者: 永井宏明